

■ 書 評 ■

杉本 厚夫 [編]

『体育教育を学ぶ人のために』

静岡大学 阿部 耕也

教育社会学を専門にする者で、近代公教育制度としての学校でどのような教育が行われてきたのかに関心を持たない者はほとんどいないだろう。しかし、こと体育に限った場合はどうか。人間形成の営みとして他のどの領域にも劣らず重要な教育の形式である体育教育について、われわれはほとんど知らないのではないか。近代学校の成立とほぼ同時に起こった公的な体育教育が、いかなる身体観をもって展開されてきたのか、どのような人間を形成しようとしてきたのか——本書はこうした体育教育の根拠を問い直す書となっている。

本書は2部構成で、体育教育学、スポーツ社会学のみならず、教育社会学、歴史社会学、文化社会学、ジェンダー論など様々な立場から書かれた16章からなる大部の書である。

日英エリート教育においてスポーツが形成したハビトゥスを比較検討する「スポーツ・エリート・ハビトゥス」(デビット・ノッター／竹内洋)。体育教育の根底に、近代社会の要件である「感情の制御」を身体訓練を通して実現しようとする思想を読みとる「体育教育によって作られた近代的感情」(杉本厚夫)。メディアとしての運動会に注目し学校空間で繰り広げられてきたドラマトゥルギー

を解明する「運動会と学校空間」(吉見俊哉)。これら3章は「体育における身体政治学」への分析である。

「近代的身体教育」では体育教育における身体把握と操作が語られる。戦時中の体育における象徴的権力としての身体文化を論じた「学校体育における身体文化の多様性と両義性」(黄順姫)。近代国家建設と平行して展開された「体操」による身体規律・訓練の実態を探った「係留される身体」(清水諭)。教育現場(特に体育場面)と暴力との関係をエリアスらに依拠しながら検討する「体育と暴力」(菊幸一)。

「文化装置としての体育」では、学校教育および近代スポーツにおいてジェンダーの問題がどのように扱われているかが論じられ(「スポーツ教育とジェンダー」伊藤公雄、「体操服の文化史」萩原美代子)、運動場・体育館が画一的・無味乾燥な風景となった背景を探る「学校体育施設の文化史」(上和田茂)など、体育のもつ文化装置としての側面があぶり出される。以上9章が第I部「近代的身体形成と体育教育」を構成するが、近代の身体観・教育観を相対化するという本書のテーマの基調をなすもので、これだけで1冊の書物となりそうである。

第Ⅱ部のテーマは「体育教育の近代化」。遊びとしてのスポーツが学校教育に位置づけられ変容していく過程を述べた「体育内容論」(松田恵示)。近代教育の布置の中で体育教師のハビトゥスがどう形成されるかを論じた「体育教師論」(沢田和明)。これら「体育教育の躓き」で、カリキュラム・教師など様々な契機により制度化されていく体育教育の社会的意味が論じられる。「体育教育の揺らぎ」では、「武道論」(友添秀則)、「表現運動論」(木村真知子)により、武道やダンスなど一見したところ体育と親和性を持つ営みが、学校教育においては矛盾と葛藤を生み、緊張関係にあることが論じられる。「体育教育の戸惑い」では、部活動が近代的身體の形成に果たした役割を辿る「学校運動部論」(榎本直文)、統合体育を通じたノーマライゼーションへの道を探る「障害者体育論」(藤田紀昭)という2編によって、辺縁的テーマでありながら体育教育の抱える問題を逆照射する視点を提出している。最後は「体育教育の願い」として、「体育科教育研究のオーバービュー」(岡出美則)により先行研究の動向と課題を提示している。

このように目まぐるしいほど多様な素材を扱いながら体育教育の根拠を問い直していく本書は、体育教育のみならず身体論・近代教育論に関する充実したアンソロジーであるといえる。ただ、ないものねだりを承知で言えば、素材だけでなく分析の仕方もバラエティに富んだものにしてほしかった。読後の“満腹感”は、全16章に及ぶ論考の充実のゆえなの

だが、味付けが似た料理を続けて食べた印象もあった。体育教育の相対化を目指し、身体／体育に関する資料をふんだんに用いた分析が展開されているのだが、その相対化の手段は歴史的分析に偏っている気がしたのである。学校体育のあり方を相対化しようとするなら、たとえば社会体育／生涯スポーツという視点から問題を照射する試みがあってもよかったし、子どもによる体育という経験を丹念に追った論考を入れる余地もあったのかもしれない。近代の身体観・体育教育の相対化だけで十分手応えのある課題なのだが、「体育教育を学ぶ人のために」という書名で、またかなり大部であるためそんな欲も出た。

その意味で途中に挟まれた「羊の柵」(川島昭夫)、「ドーム球場で野球を見る」(永井良和)、「体育教育とは、本当に必要なものなのか？」(玉木正之)というコラムは気分転換となり「刺激的なスパイス」になっているが、効き過ぎたきらいもある。体育教育を批判的に眺め、その根拠を問うことの重要性を説く本書であるが、「体育教育は必要か」という問いに肯定的な答えを用意していないように見えるのである。しかし、それが編者の狙いなのかもしれない。「現場の先生たちに読んでほしい」とあるように、様々な社会背景・制度を担った営みとしての体育を、自明視するのではなく、その存在意義を自らに問いながら実践するきっかけにしてほしいということなのかもしれない。

いずれにせよ本書は、体育教育を学ぶ人だけではなく、教育社会学の研究者に